Dr Negishi's Assessment Clinic
評価クリニック

なぜテストをするか

根岸雅史　Negishi Masashi
（東京外国語大学）

1. なぜテストをするか―建前

「なぜテストするのか。」これまでに何度かこの問いを英語の先生方に向けたことがある。というのは，どうもその根本的なところで，私たち言語テスト研究者と現場で生徒に直接英語を教える先生方とで，意識が違っているのではないかと思っていたからである。

現場の先生方のこの問いへの答えはどのようなものだったろうか。表現は様々だが，およそ次の５点に集約できる。

・生徒の能力を知るため
・成績をつけるため
・指導の成否を知るため
・生徒の診断をするため
・生徒に勉強させるため

テストをするのは，生徒の能力を知るためで，その結果をもとに成績をつける。また，単に成績をつけるだけでなく，その結果から，教師が自分の指導を振り返ったり，生徒の英語力の診断を行ったりする。さらに，テストをすることで，生徒に勉強をさせることにもなる。

これらは見事な模範解答である。おそらく，教室で実施する言語テストに関して書かれた専門書であっても，目的に関しては，およそこんなところであろう。もっとも，言語テストの文献であれば，「生徒に勉強させるため」というのは，「いい波及効果を得るため」というような言い方になるであろうが。

では，現実のテストは，そのような目的をきちんと達するようなテストになっているであろうか。成績は，つけなければならないのだからつけているだろうが，その他はどうだろう。

・生徒の能力をきちんと知れるテストになっているか
・指導の成否を知れるテストになっているか
・生徒の診断ができるテストになっているか
・生徒にいい勉強をさせる（いい波及効果を得られる）テストになっているか

生徒の能力をきちんと知れるということは，観点別の評価であれば，それぞれの観点および技能から見たときに，生徒の英語力がどうなっているかがわからなければならないということだ。また，指導の成否を知ったり，生徒の診断をしたりするには，観点や技能について，クラス全体および生徒個人の英語力の状況を知ることができなければならない。そのためには，何を測ろうとしているのかが明確でない総合問題のような問題形式ではダメだろうし，仮に問題形式は統一されていても，そこに含まれる問題のテスティング・ポイントがバラバラでもダメだろう。

このような適切な問題構成がなされた上で，結果を分析する際は，大問のテスティング・ポイントごとに結果を解釈していかなければならない。つまり，ある大問の出来がクラス全体としてよくなかった場合は，指導に問題があったか，指導しようとした事柄自体の難易度が高かった可能性が高い。それに対して，クラス全体として問題がなければ，ある大問の出来がよくないことは，生徒個別の問題として解釈されなければならないだろう。

波及効果については，テストをすると言えば，生徒は勉強するだろうという想定がある。近年では，テスト前でもそれほど勉強しない生徒がいるという

話は聞かないでもないが，問題はむしろ，生徒がどのような勉強をどのくらいしているのかを，意外と教師が把握していないという点だ。英語が苦手な生徒は，勉強の仕方が分からず，教師が想定していないような勉強に時間を費やしていることもある。いい波及効果を得るには，到達目標を生徒と共有し，その目標への到達の仕方を伝えることだろう。

2. なぜテストをするか―本音

「なぜテストするのか。」この問いに対する英語の先生方の答えには，「教師の本音」が垣間見える。前述の答えの中で，しばしば聞かれたのが「授業でやったことをきちんと覚えているかどうかを確認するため」や「自分の授業をまじめに聞いていたかどうか確認するため」という言葉であった。

最初のうちは，これらの答えを自明のことのように思い，聞き流してしまっていたが，実はここには重要な本音が隠れているのではないかと思うようになってきた。それは，テストで測っているのは，「授業で教えたこと」そのものであるという点である。

言語テスト研究においては，近年，「言語テスト研究者」は，「教師」に自分たちの研究をきちんと伝えてきたのかという議論が起こっている。つまり，「言語テスト研究」の世界の議論は，ほとんどの「教師」には届いていなかったのではないかという反省である。

「言語テスト研究」でよく言及される「妥当性」や「信頼性」といった基本概念をとってみても，教師との思惑のずれが見える。「妥当性」とは，「測ろうとしている能力をテストが測っているか」を表し，「信頼性」とは「測ろうとしている能力を安定して測っているか」を表している。これらの概念の大前提は，テストでは何らかの「能力」を測ろうとしているということである。英語のテストであれば，「英語力」を測っているという前提である。

しかし，前述の教師の答えは，テストで測っているのは，「授業で教えたこと」であって，「英語力」ではない。「(英語の) 授業で教えたこと」は「英語力」だと思われているが，実際はそう単純ではない。多くの場合、「教師が自分の英語の授業で教えたこと」は，とりもなおさず，「教科書の内容そのもの」を意味している。だからこそ，定期試験には教科書の本文が載り，その内容についての問いがなされるのだ。そうなると，それはそれで整合性があることになり，少なくとも妥当性のある問題ということになってしまう。

しかしながら，「教科書を教えるのか，教科書で教えるのか」という議論を思い出してほしい。英語の授業でやっているのは，『ハムレット』や『源氏物語』といった作品そのものを読むことではない。教科書に文章が載っていたにしても，それは何らかの「英語力」をつけるための道具である。こう考えれば，テストでは，「本来つけようとしていた力」を見なければならない。そして，その力を見るためには，授業で教師に習った既習の文章をそのまま用いたのではダメで，「本来つけようとしていた力」がついていれば生徒が読めるようになっているはずの文章を出さなければならないのだ。

テストで教科書の内容そのものを出さないことには，多くの教師は抵抗感があるだろう。生徒が自分の授業を聞く意味を見いだせなくなってしまうと考えるからだ。しかし，本質的には，英語の授業は英語力をつけるためのものである。教師の日本語訳を忠実に再生させるだけのテストは，もはや「英語力を測るテスト」ではない。

テストが生徒をコントロールするためのツールではなく，本来のツールとして機能するためには，「本来つけようとしていた力」が本当についているのかを見なければならない。そして，そのためには，ある意味，未習の文章やタスクをテストに出さなければならないだろう。ただし，そのときに非常に重要なのは，生徒に対して，授業のねらいと評価の方法について，きちんと伝えるということだ。それができなければ，生徒は定期試験を単なる実力問題と捉え，従来やってきたような「試験勉強」をまったく放棄してしまうかもしれない。その意味では，新たなテストに向けての，「試験勉強のモデル」の提示も必要だ。

このアプローチは，従来の多くの教師の慣習を変える大手術かもしれない。しかし，これはやっかいな病巣を取り除くために，必要な手術だ。